

医療 最前線

大腸がんが進行し、徐々に腸を狭め、ついには詰まらせてしまう。腸閉塞です。こんなとき緊急手術になることが多い。そこで、緊急手術なしの強い味方が新しく登場しました。大腸スチントです。上野敏行記者

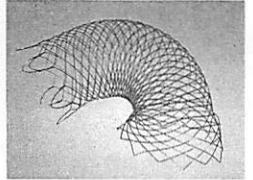
大腸がんによる腸閉塞はいきなり発生せず、発症がいきなりならず、症状も急です。強いおなかの張り、吐き気・嘔吐、腹痛などです。

詰まりのため大腸内の圧力は高まり、破裂の危険があります。緊急手術が必要な訳もここで、開腹して閉塞部を切除。たまたた腸内内容を外に出すために多くは人工肛門をつくりま

これが現在の大腸がんに対する腸閉塞の標準的な治療法です。

しかし、緊急手術は患者も家族もできるだけ避けたいと思つて、このころ、東邦大学医療センター大橋病院外科の齋田若久准教授。専門は大腸外科、消化器内視鏡

進行がんの腸閉塞



大腸癌に使う大腸スチント

外科です。腸閉塞は終末期大腸がんによることも多い。患者さんの生存期間には限りがありま

「大腸スチント」で開腹避けられる



40歳男性。大腸がんによる腸閉塞でイレウス管（鼻から胃、十二指腸、小腸へ挿入し、腸液などを吸引して腸内圧を下げる管）が挿入された状態で救急搬送、来院。ぐるぐると写っているのがイレウス管、黒い部分が腸管のガスで通常より増加している



大腸スチントを挿入した翌日、腸閉塞は解除されている。矢印と矢印の間が大腸スチント。腸管のガスが明らかに減少している

す。そこに大きな手術を実施し、人工肛門造設です。回復は遅れ、生活の質が低下します」

話は1993年に。大腸スチントが開発された時代です。けれども、食道スチントはすでにあり、食道がんによる食道狭窄（狭まる）の治療に使っていました。

スチントとは、金属製の網状の筒で、狭窄部に挿入して広げ、通り道をつくるという器具です。当時、緊急手術を避ける方法はないかと考えた齋田准教授は振り返って「食道も大腸も同じ消化管です。食道用のスチントを大腸用に流用していいはず」

そんなとき、大腸がん患者が腸閉塞を起し、救急搬送されてきたのです。

「全身状態からいって緊急手術は難しい。腸閉塞の治療にはスチントを使うことにしました」

「大腸内視鏡を使い、閉塞部にスチント挿入。通り道ができる」と大量の研究が治療のポイント

初めの例から19年間、大腸がんによる腸閉塞のスチント挿入は限られた施設で臨床研究として続けられてきました。ようやくです。

12年1月、米国製の大腸スチントが待望の保険適用になりました。大腸スチント安全手技研究会が治療のポイント

を提案しています。(2)大腸スチント安全留置のための「ニガイドライン」(腸閉塞が発生したら、できるだけ早期に大腸スチントの治療を検討すること。時間が経過すると全身状態が悪化する。大量の便がたまる、スチントを挿入しても、その内腔を通過できず、閉塞解除が困難になる可能性もある、と。

40代男性の例です。他院で腸閉塞と診断され、救急搬送で来院。大腸内視鏡で確認すると、大腸がん進行により下行結腸が閉塞。すぐに大腸スチントを挿入し、閉塞を解除しました。

症状は急速に改善、翌日には食事も可能に。10日後、全身状態も改善。大腸がんは切除可能であり、完治を目的に腹腔鏡を使い、がん部分と共に大腸スチントを一緒に摘出しました。

これまで切除可能な大腸がんの腸閉塞に大腸スチントを170例以上実施してきた齋田准教授は、いいます。「男性患者は、緊急手術と人工肛門造設を回避できました。腹腔鏡手術後も合併症がなく、経過は良好です」

人工肛門も回避

がんによる腸閉塞に対する大腸スチントの有効性と問題点を検討した報告です。(日本大腸肛門病学会誌)06年1月)

対象は、93年1月～05年3月、94例(東邦大学

医療センター大橋病院外科17例を含む)。

結果は、挿入成功率100%。臨床的有効率(閉塞が解除されて食事可能)93%でした。

挿入時の偶発例の発生

率は、再狭窄13%、ステント移動7%、穿孔(大腸に穴が開く)3%。関連死亡0%。

報告者の齋田准教授は、いいます。「大腸スチントで腸閉塞の解除率は高く、9割以上です。一方、偶発例の発生率は低

い。患者さんにとって生活の質の上昇が望める治療法と考えています」

「緊急手術と比較し、大腸スチントは人工肛門を回避できる可能性もある。大きな利点です。治療にかかる時間も短く、費用も安価です」

これらは海外の報告でもほぼ一致しています。その一つです。「大腸スチント挿入は緊急手術を23%減らし、人工肛門も83%減らして、治療費を少なくした」

大腸がんによる腸閉塞の発生率は、0.1～0.29

%。報告によって幅があるが、かなり多い。

「大腸がんは急増中であり、それに伴い腸閉塞も増えています。大腸スチントは第1選択の治療法としてますます重要になってきます」